

鐵網錄



特別
14
1919
15



A ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column on the left being the narrowest and the others being wider. The page is otherwise blank.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

A blank page with a light beige background, showing some faint smudges and a small dark mark near the center.

凌歊臺、工匠精巧、先秤量衆材輕重、然後造構、
乃無錙銖相負、揭臺甚高峻、常隨風搖動、而終
無傾倒之理、魏明帝登之、懼其勢危、別以大材
扶持之、棊即積壞、論者謂其輕重力偏也、操觚
当作如是觀 操觚十六觀

○馬郎婦

婦於金沙灘、施一切人福、凡與交者、永絕淫念、
死葬後、一梵僧來云、求我偈、掘開乃鐸子景、
僧以杖挑起、升雲而去 卷廿五玩珠

○山資

南齊書云、王秀之為晉平太守、暮年謂人曰、吾山資已足、豈久留以妨賢路、梅賾云、山資と云ふは、今俗の河の隱岳料をいふの義にあらず、山資の字は、雅なり、
り、
他云云

○船上

我邦の人彼方を載せまゐる所の物を、すべて船載、船上船来ると稱す、是よりして往くは、彼邦の事を、船上と云ふも、この方譯してワタリと和漢せざるものあり、
らん、
漢りの名も、ききまゐる、船上といふは、彼邦の地名、
酉陽雜俎曰、那伽花、状如三脊、无葉、花色白、心黄




六辨、
出船上とあり、口上

○訛字

民俗の嬰兒を美稱の語、己身を隠し、かく罵うと云ふ、現んば、バア、と云ふあり、
らん、
即、
訛字の義、
らん、
訛字の注、
云、
和、
職、
切、
音、
獲、
隱、
身、
忽、
出、
驚、
人、
之、
聲、
也、
と、
あり、
口上

○壺

壺、
苦、
本、
切、
音、
圃、
再、
雅、
宮、
中、
術、
謂、
之、
壺、
度、
雅、
居、
也、
待、
大、
雅、
云、
室、
家、
之、
壺、
皇、
明、
世、
法、
錄、
曰、
宮、
壺、
皇、
后、
所、
居、
也、
と、
らん、
の、
法、
義、
を、
お、
ま、
り、
と、
記、
ん、
バ、
我、
邦、
の、
桐、
壺、
漆、
壺、
梅、
壺、
和、
木、
壺、
と、
い、
ふ、
稱

よく明らざる事ありしを中后妃の居る所の、
の名なり、さらば桐つ不痛つ不といふ人、きりのつを
あちのつをぬ、とさるの取係る、つばを坪の字の義
そる所の取らあるとも、根の訓ありし、
の義、こん坪のあきりしとさるしとの訓あり、こん
ハ壺の字ありし、壺の字あり、
孤切、音胡、奠葬の類ありし、瓦器なり、
のつばといふ訓を、磁瓶の類の壺の字ありし、
をハつばと訓あり、
按壺古文作、
壺古文作、
壺古文作

作壺楷作壺為心、固もこの壺の二字は我邦の
人の名なり、
三人の名をすて、
壺の字ありし、
壺の字ありし、
壺の字ありし、

○白月黒月

西域印度の四俗一月を今とて二つとす、
一、法苑珠林に見ゆ、
分黒白月といひし、
ある深きけいん

○爛柯

柯を爛すといふは世の人たゞて圍棋を看みたり
の如くその多思ひのゆゑも又琴を聴くとも
如くあり、鄒道元水經注に晋王質伐木入信安
縣室坎見童子四人鼓琴質倚柯聽之既去柯爛
去家已數十年と見ゆ、他山

○皇朝の御製書の序を賜りし書唯一部

古の皇朝天子御製の序文を賜じ書あるは
ある人皇弟一百二十有一代あるを及
め六皇と稱しなれども其序を及
せぬものありて書に記さる世の儒者
誰はと名

ある中にも文字を据ひ起し人の毒沈
性宮の
精力を極りぬ其の徒仰せざる思し
慕ふに給
ふこと惜宮の文集に御製の序をか
り賜へりしか
知れぬ秘し御文庫に納め給ひた
るも後るあり
さん人ありといふなりぬ御製
の末云、朕於先
生不見顔色不通言語而百年
神文如合符即果
何之謂也所視所言所勤所蓄
庶幾乎其不差也
焉云、其一斑を見えし、他山

○乳名に康乃字を用ふ

廣東新會曰東莞多以康為兒
女乳名賤之所
以貴之男曰康哥女曰康妹
按さるる皇朝の古く

まもかりし風俗や行ふけん、紀貫之の初名をい
阿木原とて呼ばれし

○反魂衣

清土の平沢のちま古着を反魂衣と書けり右記を質物と
せしことを畿内の賤氏の傳にコレと云ふ古着
を反魂衣と云ふ偶中大よおし 揚屋後也

○南天燭

鏡の裏面をちま古着を鑄けしこと其明るる理を
象りて表を南の離すし離れ飛する明るる三卦象
ぬ氏天ハ乾する明るる二卦象ぬ氏美也明也燭又
火の用するを離るる何れも明るる飛く美しき象

るるうて鏡の表を鑄けしこと

○文章軌一軌

本鏡は平千二る年文章用けしすちま古着を
今も板りるるすし其板凡三部は在るる六万印
満りて其板或万と云ふといふことを知るる
年のうち板行出れしを見んか其年その跡深とや
いん昔板宮光と云ふ、送らんすし其年此の文章
軌一軌と云ふは此年の本鏡を承るる人の中も
其年その板行出れしを見んか其年その跡深とや
いん昔板宮光と云ふ、送らんすし其年此の文章
軌一軌と云ふは此年の本鏡を承るる人の中も
其年その板行出れしを見んか其年その跡深とや
いん昔板宮光と云ふ、送らんすし其年此の文章
軌一軌と云ふは此年の本鏡を承るる人の中も

○未通 挙

離岐初し人の後とすもるを水上といふを世すはと云
ふしつる高雲の若物を船を河舟に和して上るを水上と
云ふ唯しと云ふと書けり船舟も万葉未通女と書
ていまだらまま之と云ふ少輝をいふ初と揚る離岐
かまゝ未通揚るさゝり相揚をを厚衣と書くが
よまゝさきびらるる人をさすもるを若衣と云吹衣
と云ふるぬをすくもるぬおさづきかあはるるとい
ハ厚衣さるるさし水上のさるも杜き吹衣の上

○不經紀

清土の依修旅高いを經紀と云ふもあまゝ人其
いのみしきそ不章の氣といえり正しく不經紀と云
べし

○茶室穴居なわだて

茶室の潜口をにあり上りと云貴殿古初のもろく此
ちをいれ入す今も穴居の制もちとつゝこの歎大
体形式に自炊獨前火をまじり冥く堅付湯の
小室を補理古無古茶を長ひ伝を本をり一室を
甘んト和して狎す炉を没け茶を一つすのめ刻約を
不美さるり物とささるるゆるおほ酒の念の大奉を
忘るる時和代穴居の貴風もいへん歎全好たの

此の茶の鉢も歎望まの交すといふ可きなり其葉
を散味すといふ不可きなり一節の意をくく奪はば
べし三上

○連棚 袋棚

連棚袋棚といふ物々母の借しと民がもはげな
るありえ年連棚は月卿をたのむる没給おあき
客多し正堂に入るのとき客の冠を上棚より上鳥
帽子下の棚より下へある没しおとや袋
棚といふなり又此の多くも上をきおをいふ棚を
金枝玉葉の止んことなき御殿の没しといふこと
天子常の御油なをもを縁の袋に入ること

天子入御のとき御侍兜頭を戴て御先よりある主没
せし万々代を法をたきて袋袋棚に入らんとす
りかゝ冠鳥帽子の棚を代袋棚は上るありや菊標
御能のゆき殿の階上の様は御兜二方すまうこと
りて君しきりてあること彼御兜方とすこと
棚は血袋として壁添をのり法をぬもほつこと
とめんは美なるも上

○穴葉の紋

秋山色梅云葉は音ウリと後志馬の葉也天子
の御服の御紋は梅ハハツと云ふん鳳凰の葉
と云ふ五ツハ葉の葉と云ふは下なる用と云ふは

四ツ五ツの葉ハ若瓜キウリの切口をうらと木瓜といふいかに
事とて鳥ハ軒をうら葉をかざる若瓜ハ帽カブト類の
紋ヲ葉をつけらるゝとんをわかると云ふらけし
くくくくや多田義俊が没するに似る葉を木瓜の坊
小口とて云て祇園の社の定紋なるにすて祇園の
氏あり木瓜を名とるゝ大ひある若瓜とていふ本
風凰の葉ハ形とてある此紋を葉形と云え事ハ鳳
凰頭の大刀の鐔ハシとて、鳳凰頭の大刀ハ鳥銃の大刀
と云、日本紀とていふ頭カサ槌の大刀と有え上たると
臣下も用ひたりしが中たると天子あかると佩せると
大刀とて鐔ハシを葉と傳へて鳳凰の葉とていふ

がもの形を造りてとて鳳凰ハ天あり前ハとていふ
ん此大刀を天あり大刀と云ふんたるも鳳凰の葉
とてせらるゝをいへ法を思惟ぬるをいへ天子禁
衣を御せ行の時の葉武衣を御い法をいへ
よつて此をいへ法を御氣をいへを御いを御鬼
とていへ御とていふ武士の出雲の御とていへ
祇園葉を御い御武衣を御い御とていへ
と社頭の定紋とていへ御とていへ
田舎者の紋ハ葉とていへ御とていへ
祇園の紋ハ御とていへ御とていへ
とていへ御とていへ御とていへ

尾張國新馬の徳園の氏子とありし故に北段を馬
と云ふ事ありと云ふ事 傳山石

○わ歌の意言

和物三輪の市袋屋字の四並松の周府子のつ入
る年次和歌を記し之或るの書

七五のく見し人林麩の心と

雲日けのちるみより一の山

と詠は割を乞しと海も云ふらとむ也此の書也
まると称考すに也又詠はなるものさとちるまると
折さといふとゆを待しと或るまらぬるなる
ふかある打の心と詠るまると自ら詠を詠はる

入ちまうしと卯指沁吟の序に言ふは枝切の音
を折つらん所を尋ふるまるとはけははは男
ちの肝を清しと云ふと黙せし心所をト上
るゝ然るゝ中保割とト云ふまら歌もまら
しと云ふとト上けはは卯言くいとるまら
と視りしと云ふ

と云ふ事ありと云ふ事

一と云ふ事ありと云ふ事

と云ふ事ありと云ふ事
はる保也と云ふ事
りと云ふ事ありと云ふ事

おもしろいこともしもいんとして買ひけるもいん二條院かえんを
歌賃と云、又源流の家珍なりとんじりあ、附合なり説
き、去所採は草

○香の物

教ふ香を教ふきく、的の香并志をわつらう能う
此の香香草草ありボの境志をし、香をいふきく香を
きけ、ハ并ありたまう子をみつる娘のごとし、故に香
の物の名あり全上

○小町

牛馬門、行風の以てはけての少可ハ、少能正流う娘、方を
ほ子の根をたえんの少可ハ、少能正流う娘、方を
ほ子の根をたえんの少可ハ、少能正流う娘、方を

つ、ぬんがやのヤ可ハ、少能良文う娘、う能正流う娘、方を
ひし十所ハ、少能正流う娘、う能正流う娘、方を
故に安眠ふ少可のをも、活き香あり全上

○居士

長阿含、世生居士業、多積財寶、若為居士、普門
居士註、居士者多財多業者也、又云、居士道居士財
之士等、譬喻経、毘舍同、みん高賈市人の稱呼
と云全上

○武廟妓

古今譚概卷三十六、武廟妓一妓、每行必從百官、咸賄以求
媚、一日上侵晨從外入、妓翁尚臥、擁被欲走匿、上從

其信疾趨曰免起已而上去、少延忽聞門外鼓吹聲、乃都察院送扁至、金書免起堂三字、全上

○田沼意次の送事

江都間見録云、主殿歌書云云、金銀ハ人々余もかかたき、はらの寶さう午夜を賭うても御幸公いかし、及と郭小はどの人さんハ其志上忠多ること明さう志の原海ハ音代おつらの多少のあふり、べしといつり又云、る余日と登城して四家のあり、其子して一刻もあき心き、共正郭の的我邸の長廊下、法衣の音物おい、たっし、積豆をを足るのふんを、歴するは、三三三、リといくこと

明和安永の頃の、一時的の風物、と中程祝月の言あ、その第一、
と、貴権紳士の家々、い集ま、あを法衣、寢を置き、且、その
り、主人祝儀、用支を、その、市、の、た、く、往、事、す、う、う、の、ん
と、その、貯、り、あ、あ、り、此、貯、り、と、その、貯、り、と、は、さ、う、く、鉦
鼓、を、あ、あ、せ、し、と、田、沼、と、い、ふ、と、い、ふ、京、畿、の、田、圃、を、甘、菜、の、不
は、と、飲、せ、と、い、ふ、或、は、法、衣、を、田、沼、く、賭、と、い、ふ、石、甘、菜、の
方、九、石、ば、う、う、さ、う、内、く、一、の、小、産、を、幾、十、石、大、小、判、を、
甘、菜、の、心、の、内、の、忘、れ、戸、は、を、板、屋、と、い、ふ、の、お、お、い、は、さ、う、銀
幣、を、お、お、い、と、飾、と、い、は、さ、う、三、銀、を、以、て、三、石、の、お、お、と
あ、あ、う、い、ま、あ、あ、ら、う、の、青、甘、菜、の、株、を、植、え、の、下、に、銀
幣、を、お、お、い、つ、ま、け、る、齋、猪、を、お、お、い、と、い、ふ、お、お、い、は、さ、う、ま

のりきう乃山家の柱を搦て走らうとを甘ん
贈物の後大さうとかくの如しとさう

田況が度やしとき、後出る後首の如きあまたをた
とせり強ふゆきんを名ぞ獨窮然のほろろ世ら
る新喜おのほろろとさうら俵福したんじとさうあ
とさう云

玄裳縞衣何来鳥、徘徊在田或在泥、警看一朝
狩二雛、刷毛梳翎在雲表、軒者羽俯啄恣踰蹊
老熟良未知腹果然、已有稻梁数萬石、貪林新
課問架錢、豈意狂風起山裏、次去一拂落人
間、武才神武、川前秋知冷、夜鳴教石々列雁斑

鴻丁不任燕在笑、顧步照水形影吊、大雛曾逢
扶彈客、小為蹄嘴供咀嚼、翻未必鍛不能飛、
翅如車輪不能搏、長吟空訴腸欲斷、七星在天
夜漫

井二句は、さうとさうとあはれし二雛、山博守と孫龍助の
こと、在重あはれ言次父子歎職をそふこと、稲梁数万
石ハ五万七石を銘せしこと、新課問架錢ハ、船通を
の法を治けて郷方ハ石二十五匁、町方ハ十萬三匁を治せ
しこと、津武の前の二句、田況ハ郎ハ津田橋の内、あり
六年八月、職をあはれとせん一問読とさうしこと、大雛曾
遇の二句ハ、山博守ハ佐治の言とせんしこと、孫龍助

か馬つゝかまのを死せしとせりて田泥の家紋さ
此邊のともと鳴人の作さるに(一) 晴る田泥がことと管
合さる天造地設といふささる徳川大日記

○夜食少ゆ

元正間記に柳澤のことを記して云誰人あるか種彦
のみ柳食を道ある所さるる大名あり也羽守さる
悦はん去とる深切の燈物さると翌日湯傳を程を
えんける是を法中を法大名我おも柳食を道すべし
と思ひしは柳食を道へ進柳ありぬるさるる大
名のいけんけるは柳大名を柳食を道して多分
同し柳食ありぬるさるるを合のこととる人杜者夜食

代まうと進ぶし何さるるもぬ物のおと百さるる柳を夜
合代目録を始さるる也羽守さるるに氣かう付る成さ
方と悦する程大名又法中して此方より心遣いする
代まうと進ぶし何さるるもぬ物のおと百さるる柳を夜
あ夜法大名を始さるる柳食代おびたしきこと
依て廿の人物の柳食の物としよる名を付さる柳此
書きさるる行しるさるるさるるもお代の燈物と代信
らあつて送りし柳食のさるる也及田泥かす申を月い
しきさるるかことありき全上

○柳澤の二義園

元禄八年四月廿日柳澤也羽守より柳也深井村より

其の術を授けし道者書を授けしを道なり文是れ其の
るにこれを立本と名するは流るるかゝることありけり
徳んまらうにうらみありやといふことあり

○庸医

漢書に時の流を以て病ありて治めざる中匠を以
るといふことあり世に道ありて治めざるを庸医と
する言を以て人を服して病を治するを庸医と
病ありて治めざる中匠を以て庸医と云ふことあり
故に言ふ言を以て庸医と云ふことあり
人を治めしといふ海を以て庸医と云ふことあり

○柔術のそしり

江戸の
柔術
のそしり

拳の世所習柔術を以て備志は是を拳と云ふことあり
博と云日本にありて世に陳元賛と云ふことあり我國に
りては江戸浅草の圓心寺にあり又浪人の宿舎にあり
磯田の右衛門三浦と云ふことあり其の三人同一く彼
寺にありてありてありてありてありてありてあり
るに術ありて我を術を以てありてありてありてあり
つと云ふに人の士を術を以てありてありてありてあり
て後よりありてありてありてありてありてありてあり
るにありてありてありてありてありてありてありてあり

○足匠 宿禰

舊記を按ずると此天皇十一年麻呂命を詔し

十三年忌ハ四休の也也十二支終し又始す先支を以て
追慕を致すなり元享程事を見たりと云ふ何の以て
如き事かを詳しむと云ふサ納言行西十三年忌を梅所中納
言人を修んんとせしむ其弟の僧高僧の明通曰言て
さうしりとも也是佛家の本説と云ふ事ありと云ふ
佛家の四十のうしと止む事信者の答法を借し年
忌と云ふ事を好むなり釋瑞派味園寺一切経を指し
しして曰く此経の内三年忌服忌の事ありと云ふ
故に佛者信法を借し用之と云ふなり合上

○印版

日本に書籍を板し刻らるるその如きをいふなり元三年

山門申状に法苑坊に所造撰集者法苑寺也天
下不可止置之在々所々所持并其印板大講堂取上
為報三世佛恩可燒失之由奏聞仕伏畢とあり是
を以て見ん此のじに延撰集を跋行せし也然ハ書撰
を版りし事なり新書前久しき世よりありけり
又夢窓四阿の弟子阿範也四寺の祖也夢窓多
く佛書撰集を板し刻らるる多し阿範の跋あり
す此書の師重の跋ありし佛書ありし事傳兵と
なりしと彼版りしことくは傳之ふ事あり傳と
りし師重の跋ありし阿重の跋あり又美濃の瑞
龍寺も版りし此の阿重の跋ありし事聞

さしちう周防の山りも往考らるる所あり長門の考
積寺の三年詔の板あり又角倉と市太春の信史
記及信の本を刊版せしむ嶮岨老と云是をさう杜子
美のの家注を足利本といくともさうある所往考
朝鮮の便よきとき我國の紙をせしと板をすし
めたるを程敏政の心注附注する朝鮮の
版わたりしや血世の板印の世もそのまゝ在河内
用集りしものありしう寛永二のの江も多く
るゆゑとや心保のまゝいよく多く成るるに
あそひしや全上

○大言紙のついで文苑

河内文苑といふは高橋の中頃市中に在る故そのゆ
を得たるを言えりしがいつら台聴より故前寺
名ありしに術を試みし故前守乃ち文苑とたて
給ふといふは別ゆゑにいつらと名する文苑をさし
思ふありと信するものあり其書をあしむるに
といふは其書を其書とすししと云ふは故前
守の書の通す并珠を上下しうと二天作と
とさく五十年のうらとさくけり故前守たる所
三書の史もあつて其書を聞しと云ふは其書を天
明の教書のあつてはさしとやその書をさしし徒
すかへりしはさしし書を後する所なり文苑の

を医阿生如終を物候は後下印々々々すんきやう
こまの我あまのすまの事あんとはるをい
する戻る湯屋もあんと是しき所を面して
とちよ入りのやあると是き物後くも持事のみ
おまの表すまも物後倫子の物候といとま
きこのみき運阿のあみもやうすおまの
先の老如也あるとまはくも答あし引也との
あまの物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
来る明けまの事阿のあむ送るをいしりて
あまの物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
とこ思いつくんのきくまの物候の物候人

みいさのんて何れ行きとも思わうすは
てあまの物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
珍しくもこの物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
いかして流んけん然の運阿をたぶらうせしん
てまの物候の隠候の物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
ぬ後方まの麻布も印取つたやま火鉢打中
男は年ごろ物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
まの物候の隠候の物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
尾の山の物候の物候していざゆり後くとも又轉るおのせ
甲安寺義利とて嘉永の初に隠して麻

めり狂てはしきり一書立先言茂後了地有のほり
公以言いけり其主あり一後と仰すけん公宗
累うとてを視世左き太鼓をもたせ其亦引つ
きとあるは二書役者と仰しく公の方を向て拜せしを
公方引りていやくと答給いし公階上階下の並
に在る大十名もいとくちをあげてはめり、時
公宗はあかしくの間をけしし小刀をぬきて爪を
とちりて左書と物かこりしを右書をば見と前好
かやりの後ありありとありてはぬ太鼓に
命あつけぬおとすまの太鼓を打たしめおとす
お打して棒をかたりとてお尋ひは投すては

仕手と服印の間を存候もてし押さる公の前にも
あせしうひてしと物味のよき後者よと人ほあ
りし此の公のいするいぢりも肝をつら
今もはんよき後者をとつけて又考こんら
突い後公以言お遊して先刺も太鼓の間い
御はめり預しお物さうもいかしとて
後とすし後義終りしお物さうもいかしとて
やちるる物はとんじお物さうとありしと

上四

○日光の大石の事

日光の大石を元和四年に黒田吉政の献する所

すゝことあつて派振りさきさきいし海草のぬき祿盗の
腐電を激することを好まずとて止みしとて純信
常のぬきを鏡と貯ふるを昔毎を去りしう後年
みみいし木匠より興つてさきく天保通貨を以て
すけらる二十六年にさきか木匠大の困
い大八車二輛を以てさきかさきしとて純信撫
め短視せん咫尺のちをそ并すこと能はず因て年
とる程にぬきを金とてさきかすこと能はず因て年
此の常の徳ある余りてさきかすこと能はず因て年
袂を引て扱せしとてさきかすこと能はず因て年
のぬきけらるが或るさきか中ぬり角のそ来夫桶を并

すゝことあつて派振りさきさきいし海草のぬき祿盗の
腐電を激することを好まずとて止みしとて純信
常のぬきを鏡と貯ふるを昔毎を去りしう後年
みみいし木匠より興つてさきく天保通貨を以て
すけらる二十六年にさきか木匠大の困
い大八車二輛を以てさきかさきしとて純信撫
め短視せん咫尺のちをそ并すこと能はず因て年
とる程にぬきを金とてさきかすこと能はず因て年
此の常の徳ある余りてさきかすこと能はず因て年
袂を引て扱せしとてさきかすこと能はず因て年
のぬきけらるが或るさきか中ぬり角のそ来夫桶を并

○の曆大火迄事

大火に云御本丸天守其の石垣内より右向りしとて六間
石垣四方築き内より前より六間と唱く御用の金
銀納り大分法り方之共御天守焼失に付金銀一
ツの湯よりさきか成年端御天守其のほがら築
直しより御善法に付御前共金一ツのかたよりさきか
を修築せし来せ五十六人つ、はて三の丸中を引出し

一ツ破きをもち、前々方鑄物師が、所を徳月と云ふところ、
又云御埴中交々の思返しの鐵釘一本の代金二分、と御埴
沱西市之元申ける信信公少給いといふ御埴をん、
と云ふ所のことを、ふまらおとそ下々の指す服差
ハ鑄又もあつのし、鑄をさるゝと云ふ釘を、甲刃心
を直し一腕のまもる足又、十女を、是を釘の代
り、用いんを怒えける鐵おの代本高に、檢
り、すところ、上

○待女花

蘭待女子種則香、故名待女花、宜男草是其配對也、又
蘭不淫女子膏沐手、虽香不芳、蘭言

○蘭蕙

黃山谷云、一幹一花而香有餘者為蘭、一幹數花而香不足
者為蕙、又以花開正月者蘭、香清而雅、一幹立七花、三
四月開者蕙、香濃而濁、同上

○文章の山分水分

嘗論文有得水分者、有得山分者、子瞻水分多、故波濤動
盪、退之山分多、故峰巒峭起、日録論文

○鬱軍越

法苑珠林所載長阿含經云、
須彌山北有天下、名鬱軍越、此云俱盧洲、○縱廣
一萬由旬、一由旬乃四十里諸山谷池、華果豐茂、衆鳥和

鳴四面有阿耨達池出四大河無有溝坑荆棘蚊蟲
毒蟲○其地柔軟隨足隱起大小便時地為開
折利已還合○自然粃米衆味具足有摩尼
珠名曰皀先置自然金鍍下飯熟无減○有
柑名曲躬葉々相次天雨不漏彼諸男女止
宿其下○人起欲時熟視女人彼女隨至園林
若是父親母親不應行欲者柑不由陰各
自散去若非親者柑則曲陰隨意娛樂
一日至七爾乃捨去○多欲者一生幾至四五亦
有修行至死無欲○有諸香柑果熟之時自
然裂出種々身衣或罌或食河中寶船乘載

娛樂入中浴時脫衣岸上乘船渡水遇衣便著
不求本衣次至香樹手取樂罌並妙琴和絃而
行○彼人懷妊七八日便產隨生男女置於四衢
有諸行人出指念嗽指之甘乳充偏兒身過
七日已其兒長成與彼人等男向男衆女向女
衆○其人前世修十善行來生北洲人長三十
二肘一肘一○髮紺青色齊眉而止○其
人無有衆病○壽命千歲不增不減余終之
後生天善處○其土西方人面像之○顏貌
同等○彼人余終不相笑事莊嚴死屍置四
衢道有鳥接置他方啖食之

醫也、漢取一流之書、執一療養、其各譽達者、拔
群之仁候、云、此文、古、權侍醫、云、漢子
事、云、也、云、云、權侍醫、云、漢、云、職、
抄、云、醫、權侍醫、云、云、名、目、見、之、云、

○聖俞子美相隣

聖俞晚年謝事、卜築滄涼之信、喜得子蘇子美相隣

○終忠於漢

楊椒山先生喜物而惡器、云、終報、云、終報、云、終忠、
近、使

○以鬚文

蝴蝶、終、律、蟋蟀、以鬚文

○孔子墓

王充論衡云、孔子嘗泗水而葬、水为之却流、今墓東、
伯魚南、連子思、墓中無荆棘、無鳥巢、

○蝶蜂

道經云、蝶文則粉、蜂文則黃、

○魔滅王

安祿山、冥籍中、曾為、回向寺、胡僧、名、魔滅王、
七律、信、係

○荆公談字

王荆公論戲、云、自人道言之、文則用豆、辨則用戈、
處而後動、不可戲也、戲、實、生、患、自、道、言、之、無、人、
豆、無、我、為、用、戈、無、我、無、人、何、處、之、有、用、戈、用、豆、以、一、

為百慮、特戲事耳、戲非正事、故又為於戲、傾戲之字、
楊戲山辨之云、自人言之、君臣之義、夫婦之別、皆辨也、何
用戈之有、禮之用、三、無非道也、以用三用戈為實事、則
先王所以文神人、討有罪、皆戲耳、此何理也、余謂虛字著
一戈字、凡戲去非真殺機、然戲之始、動中、性、有、的、言
人、非、虛、戈、而、何、以上太平清話

○墨兵 葉狀

孫樵以書史為墨兵、又古人亦以史為葉狀、可謂自對、
亦可畏也、全上

○剪髮為葉

嶺南古無髮、工人剪髮為葉、遂下令、使戶輸入髮、

不能置者責值、見竅表吳錄、全上

○笑矣字

菌葦有一種、食之令人得乾笑疾、士人號呼為笑矣字、

○好謔

郭忠恕嘗以聶崇義姓、嘲之曰、近貴全為聶、攀龍
即作龍耳、雖然三個耳、其奈不聰、崇義對曰、僕不
能為聶、聊以一聯奉答、即云、勿笑有三耳、全勝畜
三心、蓋因其名以嘲之、真儒者之戲云、全上

○五色鹽

續漢書云、天竺國產黑鹽、黃鹽、道書又有紫鹽、
今甘肅寧夏有青、黃、紅、三種、生池中、全上

○紅綠

堯山堂外記云、高則成六七歲、穎異不凡、隣有高書某、緋袍出送客、則成適自塾歸、時衣綠衣、尚書呼之曰、出水蛙兒穿綠襖、美目盼兮、則成應聲曰、落湯蝦子著紅衫、鞠躬如也、尚書大驚異、稱為奇童。

○橫土 立土

土性有橫有立、關西多橫土、關東多立土、故關東牛芎方羅葛極長、關西者多短、又可見土有橫立之性矣、農人謂之立土橫土、唐書亦有此語、後山談業云、田理有橫有立、從原本、按恐立字、今潤謂之立土橫土、立土

不可編、為其不停水也、言籍云、田地有橫土、有立土、西北橫土、可以穴居、山西多窑房、即所謂陶復陶穴也、立土不可穴居、又不宜種禾、江南又有斜土、不畜水、亦可種、坤亦曰抄

○怕癢樹

紫薇花、邦語謂之猴滑樹、謂其樹無皮、猴不能攀也、唐名亦有与之同者、酉陽雜俎云、紫棠、此樹人呼為猴郎、連樹、謂其無皮、猴不能捉也、此樹搔其木、則枝葉從動、唐人因之、名曰不耐癢、氣又曰怕癢樹、全上

○穢冢

元迺賢金其墓集載岳墳行注云守墳觀祥師
至京請加封益徵賦此宋將孟珙滅金捷迴金
陵余軍士采溺秦檜墓上其詩云君不見滅金
孟珙誇驍勇凱還兵薄秦冢隴六軍涵穢
積如山千古行人呼糞塚風月臺雜識云秦檜墓
在建康墓上豐碑屹立不鐫一字蓋當時士大夫
鄙其為人兼畏物議故不敢作神道碑及孟
珙滅金回此軍於柎墓前所令軍士采溺墓上
人謂之穢冢一湖塘雜記云忠武王靈爽昭人牧人
入其廟者輒病墓前四鐵人向在牆內游人溺而擊
之膏體不完穢氣四散或慮其褻忠靈併分

屍捨移之牆外而擊者愈多云云

○樂天墓

賈氏談錄白居易葬龍門山河南尹靈貞刻醉
吟先生傳于石之墓側相傳迺為奠卮酒冢前方
大土常成泥濘元迺賢金其墓集載北邙山歌云
君不見履道坊中白太傅留客高其歌歌高至今
今三月看花人載酒去澆墳上土注云白樂天賜第
履道既葬北邙勒余起人至墳所者必酌酒至今
墓前陸地泥濘一嗟呼自唐至元無靈數百年起
人澆酒以為故事與夫秦檜之墓迺者澆溺可謂
膏壤也昔者則天武氏則王皇后蕭淑妃之手足

投釀瘻中云使二姬骨醉是妬氣之所致不真骨醉也如白傳者真骨醉也全上

○麪一斗為糊

順宗時劉禹錫干預大樞門吏接書尺數千禹錫一之報謝綠珠盆中日用麪一斗為糊以供緘封

雜記

○酒中沐浴

石裕方明造酒數斛忽解衣入其中恣沐浴而七告子弟曰吾平生飲酒恨毛髮未濕其味今日聊以設之庶無存薄全上

○急淚

宋世祖謂劉德願曰卿哭貴妃悲者當厚賞願應声痛哭撫膺擗踊涕泗交流上甚悅故用豫州刺史以賞之上又令醫術人羊志哭貴妃志亦嗚咽極悲他日有同志者曰卿那得此副急淚志曰我兩日自哭亡妾耳全上

○口吻生花

張祜苦吟妻奴喚之不應以責祜祜曰吾方口吻生花豈恤汝輩全上

○阜葢終日輪爭功

韓愈刺潮州嘗暑中張阜葢歸而喜曰此物終與日輪爭功豈細事耶全上

○赤鳳凰

趙后外傳云后所通宮奴燕赤鳳者雄捷能起樓
閣並通昭儀十月五日宮中故事上靈女朝吹塤擊
鼓連臂踏歌赤鳳凰來曲后曰赤鳳凰為誰來
昭儀曰赤鳳為姊來寧為他人乎后怒以杯擲昭
儀裸曰鼠子能啞人乎昭儀曰穿其裙見其私足
矣安在啞人乎帝微少其事以問昭儀昭儀曰以漢
家父德故以帝為赤鳳帝信之大悅全上

○朱舜水の日本注

朱舜水のゆ化年久しうしは邦語をも用ひしが
兒言のぬきあしと一り或人逢ふゆふ何のく行給ふ

わし問ぢのふあす元兵衛祝儀者といわくと冬と
又林多海も内多の押節余をいふことあつて縁を
賜りしとき御所持綿くんと人よりけりしうさ
あつとくきこも也 甲好松伝

○蘭奢待

蘭奢待とよまゑ多の東大寺の齋坊あまの八車大寺
の文字を信て丸と一と也 口上

○おきつ鯛、一富上二富三富子

或ハ多しゆく後海寺の甘鯛を生干りしををおき
つ鯛と好し名取の二も一も具は鯛と書る具は
のききうこと受も一人もあまの海寺は後海寺

も不運雄弁を述べ残る事言束へたりしを思ふ
人比ふまきんをるとき格定アツト平伏し思ひたる
中もさう流る事都の赤方城心をみるもたや仕
疾わだこもる月去らうと違ことより事後ら
のゆらふあつても一上げ述べの事一を一言毎
逆流をしつひ伸ける事際の際指さるるなり物
一日あき入るるあつたを思へるをてたしもの
も閉口し中々その逆流の思ひよもあつたが
くことと正まきこを格定の名をさうとさうあ
御書まじらうとさうの柳編

○本世文音

或人云世の中は福は思ひぬる事
此五十年前の世の文音なりし
歎をききしとさう中打原
の奥信者なりしとき誰入承
あつたものさき小納戸衆を
市楽儀に美たりしや
弄しけしを思ふよ
節侯の政令書刺さるし
事をもつらるる事
るんかえ前し
志願を羽州中へ改て

の腹を供するのやうその防無を用ひ多くは收換
ヤシの三ヶ一ハ高孫らうとさう又う赤米の祖津野
平右衛門元禄中御更ニ御着注を被へんし一人の
奔走七ありしハ一ハ加多ノ御坊より西伝のとき何
か進上と存するも事欠ふもきこもをんハせし
ちさす馬をぬまん後とありぬんハ四巻の鈴ニ
し七進上はす欺るもこの御坊よりしかハなま
本きのち後におあり加修坂御の御使者といへ
鈴の振始らぬけり折角のなまをんハ進上
おひりし馬も足ニ鞍可も其鈴を振し使者ニ
けし即時に加修ノ亭に共あり用ひちち方の御

与ありしとさう此の風儀は行は感し入りとさ
うさや筋さう人も交り人も敷をいつひとも云かた

甲子
おは

○貴族界雷

甘々雷を思ふとあるをやく最甚のときをわけり
甚々そのお核さうとよ雷を流るあまをさ
もはるしお核さう十席飯を鋪く上は橋を掛
へ橋と下室との間の梁り布幔を延そ天井とし
平らな板を天井を造りせり又綿布の幔を延
て又天井とよりこい人雷の陽刺のものも陰系
のおうもはるるあまのくはるるさうか

州の先君を丁行のしも後士等丁行又供を三を直し道
をすも清りて行なる答酒のめ勢をさへもめりもさ
ハとナラキはまをあらんとそいころもどあさること
こそ大なるこわく居る。作法もて大なるの神をむ
とるも多しと林氏語の又四果以上ニテラ契斗
目を着る中も加茂ハ平織の契斗目もそしテラ
る契斗ハ平織のときも如此こゝろ極貴なるも即ち
五位と縁のぬぬもあつて神三宮もそテラもさき
のしめ折々着やとる。全上

○ 氣のり買

寛政お摸上迄のな谷風挽と地西の関よりや堂の先

三車の関よりの関よりゆの七折綱を急せんしをぬの男も
牛の世よりの世よりし関の地の上迄のともむ法入目
をつけをたうしからえそのときも谷風ヤウトニそまつ
とや堂のマツタとそりて不え、行司別縁も標も
風とて西方も扇を揚げたり法入等不著ると思ひ
お風々思つころ雨目もるしからぬ心ぬぬぬぬぬ
思ひ居きもて行司もいせ仕方をゆをいん行司を
ふい合計もお摸るをものの中をかをあらふヤウトニ
ヌマツタとらるる氣のりもあつしそくをもの買
と御のあや市の物迄届るる旅人の秘もいり
上迄の所も於てぬおき所心もさうもいり

初しなふ流石の少望のりこもさく閉じ表而せしと
まうこの行司の古田の風とまを七代をこの行司の
実を傳のさるまを今細の杖の極家さう上流の
とまわざく四のちもて行司を勤ることさうや
川ハ久留米杖のお構うを内さハ士分のすし屋
名家とて直つゝ行司の初も云々と旅おのさうさう
合上

